



## 伊藤家明治の絵葉書「軌跡」

当時の郵便事情を探り、新たなコレクションの魅力を解明する。

伊藤家明治の絵葉書展「軌跡」細江英公人間写真展「気骨」今成家写真展「草莽」  
総合プロデューサー・ディレクター 石井 仁志(メディア評論・写真史研究)

絵葉書が収納してある数冊のアルバムの体裁をまのあたりにして、その豪華さから内容も未だ見ないうちに期待感が膨らんだ。しかも土蔵の中でしっかりと保存され、当時の美しいつやが紙に残っている。とにかく奇跡的な保存状態だ。アルバムの1ページ目、最初の絵葉書を手にとって見ると実際に通信文が書かれ、切手が貼られ、当時の消印が押されている。「うっ！」と思わず声が出た。絵葉書コレクションとしては珍しい実郵便の収集であったのだ。新潟大学人文学部GP授業の一環として、「地域映像アーカイブ」の発掘作業の途上で、ここ北方文化博物館に眠っていた明治期の絵葉書群に光が当たった。このときの調査にも同席でき、学生諸君に実郵便の解説や資料の扱い方などをレクチャーできたことも幸いであったが、わたくしはこのコレクションの特異性を理解しつつ目の前のアルバムに美しく並んだ絵葉書の画像にどんどん引き込まれていった。しかもスキャニング作業の進行につれ、文面の文言にも注意を喚起され、更にはその時代の伊藤家と親類縁者のつながりの一端をコレクションから強く感じるようになった。それにしても、ここに残された絵葉書を伊藤家に送った人々のなんと筆まめなことか、そしてペン書き、墨書を問わず、個性的であり達筆であることか。特に墨書の旧かな、当て字、行書体、草書体にいたっては、判読が極めて困難であった。にもかかわらず判読できた文面からは、当時の人々のいきいきとした生活の一端、日常の心配り、四季の移ろい、行事や旅、身のまわりに起こった事件や事象に対して細やかな通信がなされている。一見、画一的ともいえる年賀状のやり取りにさえ肉筆の優しさがこもり、雅趣が深うのである。つまりこの残された絵葉書の総体から感じ取れる事象こそ伊藤家六代目文吉の妻で夫の夭逝後を支えた真砂の感性が作り上げた伊藤家の時代相といっても過言ではないだろう。まさに才色兼備の明治女性の面影がこれらの実郵便絵葉書を通した手紙のやり取りからそこはかとなく浮かんでくるのだ。唯一つ残念であるのは真砂自身の発信、返信を確認できぬことであろう。願わくは、この伊藤家の親類縁者のなかに真砂の手になる書簡や絵葉書を保存していた人物もいて将来往復書簡の形で絵葉書のやりとりも解明できるとすればなお素晴らしいことと思う。

彼女が編んだであろう絵葉書アルバムを注意深く見てみると、発信者の絵葉書の画像の選び方や文章の書き方、画面のどこに文字を配しているかなど非常に興味深く、それぞれの絵葉書の送り手の人物像が垣間見られ、絵葉書を見ながらまるでそれを送った人物に会っているような感覚をしばしば覚えるにいった。なおかつこのア

ルバムの選者の感性、どのような絵葉書をアルバムに残したかによって画像の種類や、興味の対象や、嗜好がうかがい知れるように感じた。こういった実郵便絵葉書のコレクションはより数がまとまることによって、なおはっきりとした収集の特性が明らかになると思われるので、更なる発掘調査がなされることを期待してやまない。

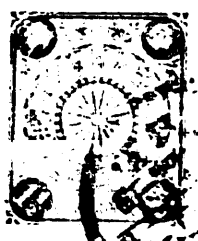
わたくしにとって、明治期の郵便事情を底辺に据えた大規模な資料調査は2度目のことである。ライフワークである中島健蔵研究(書誌研究)の中で、中島自身が郵趣協会の初代会長であり、かつ小判切手の消印から当時の全国の郵便局名をつきとめるという遠大な計画の実行者であったこともあり、わたくしも明治・大正期の郵便事情を調べざるをえず、当然のことながら伊藤家のコレクションを含むこの時期の絵葉書流行の歴史もある程度は認識していた。だが実際に豊富な現物をこうして眼前にすると当時の文化を包含した温かみのある素朴な画像の力、印刷、エンボス加工などの技術力に驚かされるばかりだ。この絵葉書群を保存してくれた真砂夫人が、ひとりで絵葉書帖を管理してアルバムを形成したのか。この蒐集にどれほどの熱意と工夫とを費やしたか、更に彼女にとって、この行為の積み重ねが趣味といえる領域だったのか、それとも実用の延長線上に収集されたものだったか、これは今となっては推測する以外には手はないが、少なくともこれだけの枚数をまとめた実郵便絵葉書コレクションは全国でも極めて珍しいと思う。ともあれ、実郵便、未使用を問わず彼女の明確な意思によってアルバムに整理して保存された絵葉書群は当時の通信事情、郵便制度の中の絵葉書ブーム、現代に置き換えるならメールやツイッターの役割に近い絵葉書通信の実情を知る上で極めて貴重である。

とはいえこれらの発見された実郵便の当時の郵便事情に鑑みた調査はまだ始まったばかりで、整理もなされていない。しかし、調査の方向性、可能性はある程度示うと考えるのでそれを掻い摘んで列挙してみよう。いわば実郵便絵葉書の新たな魅力を付加研究するための序論である。伊藤家の六代文吉夫人真砂による1905年から1913年までの絵葉書コレクションを当時の郵便事情の中で分析すると、まず未使用の絵葉書の宛名面に私製絵葉書の製造販売元が小さな字で印刷されている。それはとときには印刷会社であったり、製造販売会社であったりと多種多様である。切手を貼る場所指定の四角点線内には内国一銭五厘、外国は四銭の切手を貼るよう指示が印刷されているものもある。特に戦争絵葉書にはこの印字が入っている。画面側にも広告用に発行し配布した会社名が印字されているものもある。また、これらの広告絵葉

書はシリーズ化された物によってはかなりの枚数の絵葉書が一枚の大きな紙に印刷され、点線で容易に切り離せるようになっていたと思われるものもある。土産にという絵葉書の性格からこういった印字は欧文で印刷されたものも多い。将来これらの印刷文化や、流通面の研究のためにも前述したような要素を見逃さずに整理するべきであろう。実郵便絵葉書の宛名面では、何といても切手および消印を中心とする変化に注意が必要だ。伊藤家絵葉書では次のような事象が確認できる。

当時の主要な切手は菊切手と呼ばれる。菊切手は凸版印刷で印刷されその名称の根源となる菊の御紋章が中央に大きく配された切手群であり、1899年から1907年にわたって製造された。菊花紋は天皇の象徴であり、かつ強大な国家権力を表していた。日清戦争の勝利などにより侵略的国粹主義の高まりといった風潮が影響したことは否めない。しかも日本社会は産業革命期ともいうべき時期にあたり、通信手段としての郵便事業も格段の飛躍期になっていた。勢いそのままに菊切手製造のための要件通達のひとつには欧文による国名を断然省くというものもあったという。更には賈物の発生を防止するために製版過程で機械彫刻の規格化が徹底された。この菊切手群が伊藤家絵葉書の実郵便に使用されたのであり、保存されたもののほぼ全ての切手が菊切手である。つまりこの事実こそ伊藤家絵葉書の年代を推定から事実へ格上げしているのである。次の田沢型大正白紙切手の最初の製造が1913年であるから、ぴったりと実郵便の年代が規定されたことになる。さてこの時期の国内郵便の料金は私製葉書で一銭五厘であった。菊切手の一銭五厘額面は大きく分けて2種類、刷色が灰色がかかった青のもの\*と、暗い濃いめの紫のもの\*\*1である。前者は1900年10月発行、後者は1906年5月から売り出された。つまり、にぶ紫と呼ばれる後者の切手が貼られた実郵便絵葉書は少なくとも1906年5月以降の使用であり、例え消印が判読不能でも年代は類推される。ただし前者は後者発行後もずっと使用されているので注意が必要だ。伊藤家の私製絵葉書は当然この色別にして2種類の切手貼りのものが主流である。更には一銭五厘の切手一枚貼りとは限らない。一銭赤茶と灰色の五厘切手の2枚貼り\*\*\*、五厘切手のみの3枚貼り\*\*\*\*も見られる。ちなみに、郵趣の世界ではこういった実郵便のエンタイヤがオークションなどで取引されるのだが、貼ってある切手の種類、枚数(額面)、消印の種類などで評価が変わる。つまりは伊藤家絵葉書の実郵便はその一枚一枚に付加価値もあり、物によってはかなりの高額のものも存在する可能性があるのである。話が横道にそれたが、それぞれの使用葉書をこういったエンタイヤの種別としての観点から分類しておくことも大切である。切手の色で大きく二つと分類したが、実は目打ち(切手周囲のギザギザ)の数や紙など細かな分類はまだ存在する。しかし、伊藤家絵葉書の実郵便の分類や研究では、これ以上の詳細な分類は困難を伴い必要を感じない。むしろ、これから述べる消印の読み解きこそ

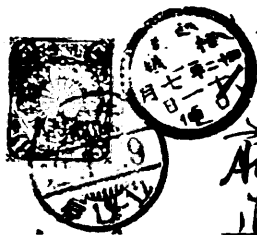
欠かせない作業であろう。まず第一に1905年から1913年の間に使用された主な消印を紹介しよう。丸一型日付印、櫛型日付印の2種がもっともポピュラーであろう。\*\*2この2種の消印にもいろいろ種類があるが、煩雑になるので解説は省く。殆どの私製絵葉書宛名面には、切手上とその他の面に2ヶ所の消印が押されている。これは郵便局、すなわち集配局と、配達局の印である。それぞれの局が丸一型消印を押すだけではなく、物によっては丸一型と櫛型が押されたり、丸二型が押されたりと消印はバラエティーに富んでいて面白い。とにかくどの消印が宛名面にあっても、そこから汲み取れる情報が大切であることに変わりはない。どこで何年何月何日に出された郵便か?いつ受け取ったか。これが消印から読み取れる。がしかし消印は判読できるものが意外と少ないのも事実である。特に場所、局名が判読できるものはありがたい。



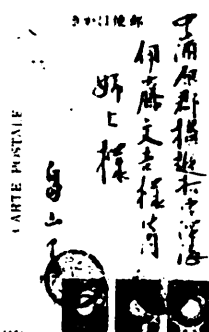
(\*)  
灰青・1銭5厘菊切手に丸一型日付印

にぶ紫・1銭5厘菊切手 (\*\*1)

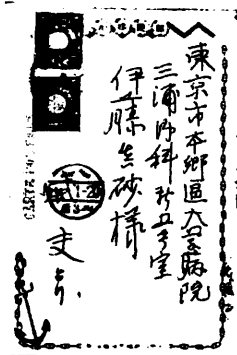
(\*\*2)  
丸一型日付印(右)  
櫛型日付印(左)



(\*\*\*)  
1銭と5厘の菊切手2枚貼り  
丸一型日付印と丸二型少数印

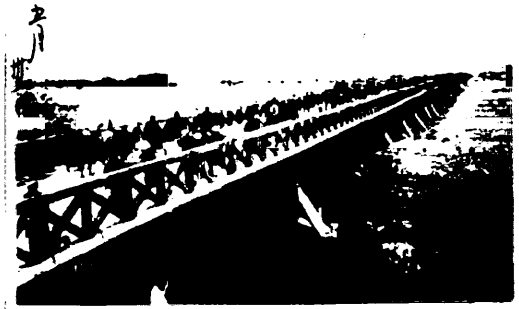


(\*\*\*\*)  
5厘菊切手の3枚貼り  
丸一型日付印で消印



例外はあるものの伊藤家絵葉書では本宅宛が多いため配達局印は時期によってほぼ同じ消印が使われていることが読み取れる。消印にはまるで個性と表情がある様に見える、いろいろな情報を読み取ることができるのだ。伊藤家絵葉書の中で、数はぐっと少なくなるが、鉄郵印（鉄道郵便印＝路線名や時刻が読み取れる）が押してあるものや、切手の貼り忘れなどで、未納印が押されたものもある。これらのエンタィヤの郵便的評価は、汚れなどの度合いにもよるが、数千円から物によっては一万円を超えるものもあるという。

値段もさることながら当時の郵便事情や歴史をも含めて、こうした通信内容をかかわった人々の心情も汲みつつ紐解いてくるとつくづく六代文吉の妻、真砂が伊藤家の所帯を背負って奮闘していたことが、まるでつい昨日のように思えるほど響いてくる。それにつけても様々な魅力を抱え込んだ伊藤家明治の絵葉書コレクションや新潟各地の貴重な資料がより多角的な分析を受ける為には新潟大学人文学部地域映像アーカイブのGP授業で続けられている資料のデジタル画像化（スキャニング作業）や地道な資料発掘作業がより一層必要不可欠になるだろう。そして見えてくるアーカイブスの未来、多様性こそがこれからの人文科学、文化構築の大いなる指針となると、わたくしは信じている。



NC-C-001-1-144b 初代の新潟万代橋



NC-C-001-1-184b 佐渡國新町ノ景

### 伊藤家明治の主なできごと

西暦	和暦	できごと
一八六九	明治二	藩邸事務により沢庵の蔵本小浜知行所の蔵書が接収される。五代文吉は知行所御用通を廃棄となる。
一八七〇	明治三	十二月二十五日、藤次郎(後の六代文吉)が生まれる。
一八七三	明治六	藩邸事務の千町歩地主・市島、白崎、田島ら、藩本集合の呼びかけで第四回立銀行設立の主体となる。
一八七五	明治八	八月二十九日、三代文吉(前名、為次郎)が亡くなる。八十四歳。
一八七六	明治九	八月十六日、村山真砂(後の六代夫人)が生まれる。
一八八二	明治十五	現在に残る伊藤邸の着工。大工の棟梁は斎藤金馬。
一八八五頃	明治十八頃	土蔵門(現在の博物館正門受付)が建てられる。
一八八七	明治二〇	伊藤邸、十一月に上棟。
一八八九	明治二二	漆作、障子、畳等が揃い、伊藤邸の工事が完了。
一八九一	明治二四	藤次郎の寄書「元澤川築工」設計は藤次郎、棟梁は斎藤金馬。(元澤川は三角園と呼ばれた。昭和二十年通りに現在の「三澤亭」となれられる。)
一八九一	明治二四	新築回しはたのかつての大名藩口藩の清水を下屋敷(現在の清水園)を買い上げてもらいたい旨の申し入れがあり、これを受理。
一八九二	明治二五	十二月二十九日、五代文吉(前名、要之助)が亡くなる。四十八歳。藩キイ四十三歳。藤次郎二十一歳。
一八九二	明治二五	一月八日、藤次郎邸。
一八九二	明治二五	翌九日、改名許可届出。藤次郎が六代文吉を襲名。
一八九二	明治二五	六代文吉(前名、藤次郎)と村山吉次(の次女真砂)が結婚。真砂十六歳。六代文吉二十二歳。
一八九四	明治二七	五月二十三日、入城。九月三日、入城。
一八九四	明治二七	三月二十九日、六代文吉の長男文之助が生まれる。日枝神社(後の「文之助丸」の屋敷)を時翌年の明治二八年十月二十八日、天折。(二歳八か月)
一八九六	明治二九	十二月十一日、六代文吉の次男芳夫(後の七代文吉)が生まれる。
一八九五頃	明治二八頃	ものに「日本の石巻」と言われる中野寅二(石巻藩預金番)を勧進。
一八九七	明治三〇	新潟商業銀行(後に新潟銀行)が資本金十郎(五代文吉の次女ラウが夫)によって設立。
一八九八	明治三一	十二月二十四日、六代文吉の三男芳夫が生まれる。
一九〇一	明治三四	四月五日、六代文吉の四男芳夫(後の第一番頭として務める)が生まれる。
一九〇三	明治三六	六月十一日、六代文吉(前名、藤次郎)が亡くなる。三十三歳。妻真砂、二十七歳。
一九〇三	明治三六	同年七月六日、八歳の次男芳夫が七代文吉を襲名。叔父の伊藤九郎太郎が後見人となる。
一九〇七	明治四〇	十二月二十三日、六代文吉の五男芳夫が生まれる。
一九二二	明治四五	伊藤家の菩提寺である光國寺の改修にあたり、六代文吉の墓キイの墓門により、多量の寄進を行う。
一九三六	昭和十一	二階建ての邸敷を新築。元澤川(現在の「三澤亭」)は北へ移築し、離れとなる。